

世界俳句の開花

— 第三回世界俳句協会大会から

Ban'ya NATSUSHI

夏石 番矢

現地の日本大使館からは、前日まで荒れ模様続きだと、メールで知らされていたブルガリアの天気は、私たちが到着したとき、大きく好転しようとしていた。七月十四日の夜、ソフィア空港に降り立つと、雨上がりの甘い草木の匂いが、私たち日本人を歓迎してくれた。この匂いは、西ヨーロッパのつんとしたメントや針葉樹の匂いとは違う、日本の草むらや森でよく嗅ぐことのできる、甘い匂いに近い。

世界俳句協会は、二〇〇〇年に、スロヴェニアで創立大会を開催し、二〇〇三年には、第二回大会を日本の天理で開いた。今回は、日本に次いで会員の多いブルガリアで、第三回大会を催すことになった。テーマは、西洋

と東洋の間に位置するブルガリアにふさわしく、「俳句、その東と西」。

ブルガリアで実際に感じた俳句熱は、生半可ではなかった。到着の翌日、七月十五日の朝から取材攻めにあつた。ブルガリア国営テレビの、朝のワイドショーに生出演し、夜のニュースのためのインタビュウを受け、大会の最中にも、テレビやラジオの取材を再三受けた。また、開催前から新聞にも、俳句の特集がしばしば組まれた（開催後には、ブルガリアの名誉ある外交雑誌にも記事が掲載された）。

ブルガリアのジャーナリストから何度も質問されて、私が自分で確認したのは、日本の俳句が、自然や人間の細部にこだわる傾向が強いのに対して、海外の俳句は、ものごとを大づかみにする傾向があるということだった。

大会初日、十五日の夕方、首都ソフィアの在ブルガリア日本大使館での大会歓迎会は、百人の出席者を想定していたのだが、その予想を約二十名超える盛況ぶり。福

井宏一郎大使、世界俳句協会共同創立者・ディレクター 夏石らのあいさつに続いて、十一カ国二十人の詩人や俳人が自作を母国語で朗読し、続いて英訳、和訳、ブルガリア語訳などの翻訳が朗読された。世界俳句の多様な開

花が、現実の声として、自然賛美、都市の哀感、宇宙創成、神話、孤独、祈りなど、さまざまなテーマのもとに差し出された。

竜はなぜ盗む／金の林檎／ほかのが甘いから

デイミータル・ステファノフ（ブルガリア）

六月／あらゆる草の葉／まったく奇跡

リチャード・バーンズ（英国）

混んだバス／汗かきつぶやき／よっぱらい歌う

ドラガン・J・リステイッチ（セルビア）

日暮れ／影法師／休もうと横たわる

リュードミラ・バラバーノヴァ（ブルガリア）

女のスカートごし／月光が打つ／胎児

ヴァシレー・モルドヴァン（ルーマニア）

三日月の明日の重さを考える

秋尾 敏（日本）

シヤム猫スキヤンす／波板状の鉄／雀の屋根

デヴィッド・プレイター（オーストラリア）

野の岩のここには虹が帰ってくる

鎌倉佐弓（日本）

蝶一羽さまよう／潮と風の／白い預言

アラン・ケルヴェルヌ（フランス）

麦の秋乳ふくませる土人形

樽谷俊彦（日本）

ライムの花／車の警笛／ライムの花

マルティン・ベルナー（ドイツ）

最も感動的なのは、共産主義政権に抵抗したブルガリア

アの不屈の詩人、外交官エドヴィン・スガールエフの、

壁の間に生まれ／地平線だけが／私を隷属させない

自らの信念を力強く詠んだ秀作を、聴衆を圧倒する気

追で朗読した。

俳句朗読は、大会第二日、第三日にあたる、十六日、

十七日の夕方、ソフィアのヨーロッパ・ブルガリア文化

センターと、最終日の十八日、古代から栄えた交易都市

プロヴディフの民族博物館でも、熱気むんむんで開かれ

た。

音楽と地球／溶け込む／深淵より声

カジミール・ド・ブリーター（ポルトガル）

青簾透明人間出てゆきぬ

小林俊子（日本）

死んだ影たち／稲は伸びる／宇宙が来る

ペパ・コンドヴァ（ブルガリア）

今は平和に夕暮れの白芙蓉

中村武男（日本）

空襲警報の鳴るあいだ／どこも走らず／案山子

アレクサンダル・バヴィツチ（セルビア）

焦るまいモーツアルトを聴く蝸牛

山羊（日本）

痛み／そのなかに／無限

アレクサンドラ・イヴォイロヴァ（ブルガリア）

学生たち教室／探す蟻たちは／穴掘り続け

デヴィッド・G・ラスー（米国）

未来の真つ青の階段のある地球

湊 圭史（日本）

とりわけ十六日の夕方は、ドイツからの参加者、エリ

カ・シユヴァルムが、自作俳句の、

生け花シヨ／葉っぱの上で揺れる蜘蛛／拍手され

さながらに、草月流の生け花と俳句朗読を結びつけたパフォーマンスを見事に行ない、大会に文字通り花を添えた（残念なことに、エリカ・シユヴァルムは、二〇〇五年十二月中旬に他界された）。

本大会のメインは、十六日、十七日の午前と午後、ブルガリア文化・観光省ビル内にある、ヨーロッパ・ブルガリア文化センターで行なわれた、十カ国十二人による講演。

講演者の一人、ポルトガル・ペンクラブ会長カジミール・ド・ブリトーは、部分を詠んでも、さらに大きい全体的世界観を暗示する短詩として、俳句を的確にとらえていた。ド・ブリトーは、子供のころから、祖父や父から聞かされた短いことわざに興味を持っていた。英国詩人のリチャード・バーンズは、先人観から解放された短詩として、俳句を子供に創作させている自らの実践方法を報告した。その例として、次の句を挙げた。

木のテーブル／すばらしい熱帯雨林／人間の非道

前出のエドヴィン・スガールーフは、西洋の二番煎じに

甘んじがちなブルガリアの詩を、野生の直観へとよみがえらせる生々しい短詩が俳句だとの信念を述べた。

このほか、ロシアからのドミートリイ・クドリヤ、ウクライナからのオレーグ・ユーロフなどによる講演も行った。

日本からの講演者は三人。そのうち、夏石は、鈴木大拙、R・H・ブライス、ロラン・バルトラによって、禅と俳句が必要以上に重ねられて西洋に紹介され、世界中にゆがんだ俳句観が広まった経緯を批判し、俳句は短いなかに、一つではなく、いくつかの時間的変化を内包する短詩だと主張した。俳文学界でも活躍している秋尾敏は、漠然とユーモアとしてしか西洋に理解されていないかった俳句の「滑稽」が、こわばりを乗り越えた、自在な世界観をもたらすことを、次のような実例を挙げて説いた。

道のべの木槿は馬にくはれけり

淋しいからだから爪がのび出す

空飛ぶ法王昏睡したまま着陸す

俳画は、日本では、古めかしい墨絵を思わせるが、海

外では、墨はもちろんのこと、水彩絵の具、写真、版画、コンピュータ・ソフトなどでも、さかんに創作されている。コンピュータ俳画作家、清水国治は、自作の工夫をあかしながら、俳画における文字と絵のバランスをもつと考慮すべきとの助言を与えた。なお、清水自身による俳画のホームページは、次のとおり。

http://www.mahoroba.ne.jp/~kuni_san/haiga_gallery/

このような盛りだくさんなイベントに加えて、十六日と十七日の夕方には、伊藤園新俳句コンテスト、吟遊俳句賞、世界俳句協会ジュニア俳句コンテストの結果も発表された。

世界俳句の最大の意義は、日本語や英語にとどまらず、それぞれの多様な言語で、人間の英知のエッセンスとしての俳句が書かれることである。いま、この歩みは、課題をあきらかにしながら、着実に進みつつある。

なお、第四回世界俳句協会大会は、二〇〇七年に、日本もしくはニュージーランドで開催される予定である。

松尾芭蕉

尾崎放哉

夏石番矢